

# がん患者の自己アイデンティティの再帰的構成

## ——がん患者の就労に関するインタビュー調査から——

大正大学大学院 河田純一

### 1 目的

「働く世代」のがん患者の増加により（遠藤 2016），がん患者の就労問題は、国の「第2期がん対策推進基本計画」において重点分野とされるなど大きな関心が寄せられている。「働く世代」のがん患者にとって就労は、単に経済的な側面だけではなく、「がん患者」として社会の中で生きていく上での自己アイデンティティの再構成にとって重要な意味を持つ。

これまでのがん患者の就労に関する研究は、量的調査・研究が主流である。量的調査からも、がん患者の人生設計（life-planning）の変更とそれに伴う自己アイデンティティの再構成について一定の傾向を明らかにすることはできるだろう。しかし、個々のがん患者の就労に関する経験は、がんの部位や進行状況、そしてそれまでの生活史によって大きく異なる。しかもそれは、個々人の自己アイデンティティの再構成と密接に関わり合う。したがって、本報告では、がん患者個々人の語り注目することで、がん患者の就労という事象を自己アイデンティティの再構成の過程として明らかにする。

### 2 方法

本報告では、がん罹患時に就労経験のあるがん患者3名へのインタビュー調査を行い、彼らの語りを自己物語の視座から分析する。具体的には、それぞれのがん種とその治療による差異、がん罹患以前の職業生活および人生設計と罹患意向のその変化、職場におけるコミュニケーションに着目する。分析においては、現代社会における自己アイデンティティの動的な再構成過程を明らかにしたアンソニー・ギデンズの再帰的自己論を理論的枠組みとし（Giddens 1991=2005），「がん患者」として働く上での自己アイデンティティの再構成過程に注目する。

### 3 結果

がんが職業生活に及ぼす影響は、肉体的な側面だけではなく、企業文化や制度、それまでの職場の人間関係等により個別性が非常に大きい。したがって、個々のがん患者が自らのがん経験を客観視し、それをもとに他者を説得し、人間関係を再構成していくことが求められている。

### 4 結論

がん患者が就労を続けていくためには、「がん患者として社会の中で生きる」という新たな自己の戦略を伴った自己アイデンティティの再構成が必要とされる。そのために、がん患者たちは、より再帰的・自己自覚的な自己アイデンティティの再構成をしていくことになる。がん患者の自己アイデンティティの課題は、ギデンズが現代社会における自己の特徴として挙げる、自己自覚的な形で常に再帰的に再構成され続ける側面を顕著に示している。

### 文献

遠藤源樹 2016 「特集 がん罹患社員の就労継続に向けた休職・復職への実務対応：日本初の「復職コホート研究」から見えてきた治療と就労の両立のための運用ポイント」『労政時報』(3921), 74-93.

Giddens, Anthony 1991 *Modernity and Self-identity: self and society in the late modern age*, Stanford University Press. (=2005 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』ハーベスト社.)

厚生労働省 2012 「がん対策推進基本計画（第2期）」